

## 人との出会い

高島 寛

一九六一年、大学（國學院）を卒業。不動産建設に入社。国文科卒業で、なぜ建設会社に入れたのか、とよく聞かれる。出た高校は、今宮工業高校の建築科で、大学の三年の時に二級建築士を取得していたのだ。大学は東京だが大阪で高校時代の文芸部の仲間と、同人誌『舟唄』を創刊。舟唄は仕事の歌だということの名付けた。「潮夏」「水郷」「雨女」（後に「雨降りかぐや姫」と改題。一三二枚。四人の男が一人の女を囲う話、平安貴族を気取る。今工は男子校だったから、部員は男ばかりで反発は起らなかった）

当時文校は半年でチューターが交替し、前期のチューターは、北川荘平で、後期は村田拓であった。この二人には文学との取組み方を教わった。私にとっては恩師であった。卒業後、松岡事務局長からチューターに任命される。今と違って、文校の入学生が鰻登りであり、新しいチューターを必要としていた。私の他に、高村三郎と滝本明（詩）がなった。一九六七年のことであり、文校が身にあっていたのか、それから五十年、八十歳の定年までチューターを続ける。

六六年から六九年と、『新文学』（現『樹林』）に、「鳩」「塀」「塀」「揺らぐ森」などを書く。建設会社という仕事柄、夜

間部のチューターは勤められなくて、通教部のチューターだった。正面のチューター席で机を並べていた、松原真理子さんに《住宅シリーズ》だといわれる。「鳩」は文化住宅。「塀」は市営住宅。「揺らぐ森」は公団住宅。建築を仕事にしていたから、住宅は書きやすい。その住宅の中の暮しがイメージできて、違った作品がいくらかでも書けるのだった。

私は文校のチューターとしては、前記の事情で大半が通教部であった。北川荘平もそうであって、スクーリングでは長年彼と机を並べた。作品の批評の仕方は彼に教わったのである。

一九六七年、チューターになったその年、村田拓と一緒に『どまんなか』を立ち上げる。同人に飯塚輝一、軽尾たか子、奥野忠昭、日野範之等。後にその流れで、福本武久、森沢友日子、松原真理子を加え『ラグタイム』を結成。

ここまでは、文校との出会いを書くために昔の話ばかりになったが、そんなことばかり書いても始まらない。同人誌としては、現在まで続く『あるかいど』があって、一九八二年の創刊号に「出発にあたって」という私の巻頭言から、文校と同人誌の関係を見ていきたい。

《出発にあたって》

ここに集ったのは、大阪文学学校第二次第一期生、高畠グループのメンバーが中心である。文学学校という、年令も経歴も職業もまちまちな人々の出会いの場の中から、書くことの熱意を持続させていくために、卒業後、グループを形成していくケースが多く、私達もその一つであった。(いわば文校の仕事のアフターケアの性格を持っていた)

第二次第一期生は一九八一年春の卒業であって、以後、約一年の準備期間を経ている。

この準備期間中、書き直しを前提に、月二回の合評会を持っていた。(これは文校の「ゼミ」を真似たもので、『あるかいど』では「事前合評会」として今も続けている。)創刊号には書き直したものが、全員顔をそろえたから、かなり分厚いものになった。

これまでの、こういう地道な努力を可能にしたのは、事務局に人をえたからである。岡原氏というオルガナイザーに負うところが大きい。(特攻隊生き残りの彼は、進軍ラッパとあだなされていて、書き遅れている同人に電話で尻をたたくのだ。こういう人がいないと、作品がそろわない)

年令も経歴も職業もまちまちで、当然かかえているテーマもまちまちだが、自分を表現するのに、誰もが小説という形式をこよなく愛していて、それが共通の原動力になり、これらの活動を可能にした。

おたがいの異質性を認めていくこと、文学を限定しないこ

と、多様性の中に、みずからを解放し、参加していくこと、がグループの了解事項である。(要するに「小説」はなんでもありということ)

私たちは、今のところ小説という器に、限界を感じていない。小説で、あらゆる内容をもりこむことができると思っている。それが充分満たされないのは、自分たちの力量が不足しているからであって、だから欲求不満だ。この欲求不満は解消されないかも知れないが私たちは希望を捨てない。全員参加で、それを乗り越えるしかない。これは共同作業である。(以下略)

最後に、どこの新聞に書いたか忘れてしまったが、文学学校の文学に対する私の思いを書く。

一言でいって、文学学校は他流試合の道場である。ぜんぜん知らないもの同士が、教室に集って、互いに批評し合う。これを合評という。なんでもありで、チューターは何も教えない。最初、文学は学校たりうるかと思っただ、それが文学学校だ。高校生の頃、大阪の講道館で柔道を習ったが、そこでは何も教えてくれない。知らないもの同士が他流試合をするだけ。それなのにめきめきうまくなる。國學院大學で柔道部に入った。いきなり三段の人とやったが負けなかった。小内刈と内股が誰にでも通じるようになっていたのだ。

小説の場合も個性が要求されるのだ。その人流のものの見方、感じ方が大事なのであった。それを育てるのが文学学校だと思ふ。それは人から教えられるものではない。その人の

生き方、感じ方から生まれるものだろう。文学は学問ではない。しかしいろんな本はできるだけ多く読んだ方がいいと思う。柔道でもできるだけ多くの人と対戦した方がいいのと同じだ。そうしないとその個性は片寄ってしまう。

『いま、文学の森へ』（大阪文学学校の五〇年）で、そのあたりのことを書いている

書く、読む、合評する——実作主義の文学学校は、作品を介して人と人と出合う場であり、それ以上でもそれ以下でもない。そこは知識を切り売するような教育の場ではない。多くの文学の無名戦士を生み出す「文学の使命」は、「表現者の育成」である。その人がまず自己と出合うこと、自己を発見すること、そのことが「表現」と同時である。人の作品を読み、批評することが、自己の表現を養うことであり、他者と出合うことである。他者と出合わない作品はモノローグである。小説に必要なのはダイアローグ（対話）である。文校はこういう意味で共同制作の場であり、これが真の教育であろう。文校のこの基本的なシステムが五〇年の文校の歴史を支えてきた。